

夕霧（小詩會詠草）：和歌：文苑

著者	錦浦，白月，鳳章，天戟，星陵，夕闇
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 1 4
ページ	4 1 - 4 4
発行年	1905-11-23
その他の言語のタイトル	夕霧（小詩会詠草）：和歌：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5886

○尾

浮世のさがにほだされて

理想も戀もなき身にて

消ゆるにたふる君ならず

頭陀の姿に身をやつし

此世をわびの姿かな。

鹿の鳴く音に夢破れて

昔の戀を偲ぶ時

秘めんとすればなかくに

胸に傷を多からむ。

和

歌

霧

霧の夕にささるる霧 霧はゆるる風かすまわす

薄霧のほのめく方に百舌鳥なきて夕日の丘を馬かそりゆ

君病むときくに伏目の萩が里夢の小路を鐘たそがれぬ

、黙禱の露の朝けを神の鈴ふるとて馴れし吾かひなかな

芙蓉の雨朽棄の風とうつろひに久遠の夢の秋あわたし

會 詠 草

山の庵いほも秋とや獨りねの夢路に落つる松風の聲

夕ばねの光薄るよ託摩野や秋の阿蘇が峯たかねむらさきにして

鐘の音は狭霧に消れて夕榮の色美はしき山もとの村

夕風に沼の枯葦穂ゆらぎて鷗かもめの波の夢やすからず

風白く雲ひやとけき暮のまご小き思のあやしうみだる

月の磯さびしきまづに君が名を思はずよびし我聲高し

○

朽ちてゆく小草の靈の夢のせてひとりさやく野の名なし水

野に立ちて狭霧に沈む鐘の音に吾世の秋を高誦たかよみせば足る

落日や廣野をめぐる雲わかれて風なまぐさき亡國の秋

亡骸を小萩が下に葬ると共鳴り渡る蟋蟀せせがれの聲

さすちひや今年羅馬の秋に三いて行く手の空に乱れ雲見る

森かげに又新しきいのちへて清水ささやく秋のあくがれ

歸らばや父の御靈と同胞はなの情と薰くもる御國の秋へ

○

秋よさはかくも悲しきものならば愁うれひにこはの歌あらしめよ

○

月

章

載

、敗れたる芭蕉にすがる螳螂の影ほのくら秋の日暮れぬ
 夕霧や愁ひにたへぬ若き子の姿つとみて闇に消ゆけ
 、木犀のかをり烈しき秋の日は昔にかへる戀よ思よ
 山鳩のなく音わびしく夜は明けて蕎麥の花白し曉の雨
 、芭蕉葉のみだれに灑ぐ夕雨や秋は寂しきうれひあるもの
 ○大海とはのたくつきひやかに秋をうれひの人いたましむ

(篠原君を悼む)

星

陸

野分して落葉しそめし檜の木的林めぐりて降るや村雨
 霧に更けし海のやうなる都大路波のごよみときくや世の聲
 我が夢を乗せて流さん貝あれと暮れゆく磯をめぐり見し哉

○

夕

聞

なげうたば花ともなれの枯落葉夕べのあやに聲なきうらみ
 、人死ぬの夕べひそかに鐘なりて語るにたへぬ秋さび心
 空高う我世の秋をしらすとて光まじみに星はさねたり
 行く秋の精をあつめてさびしさの宵をながるゝすち野川
 黄金なす天の緒琴の絃やそれ空にすぢひく秋のゆふばね
 、海遠く帆船送りし夕べより離れ小島に秋をねばねぬ

まぎれたる思を野べにかへすべき小鳥もあらで風にゆく秋

暗 森

高 田 天 山

秋雨の海をたよげど音はなうて胸にぞびくけうれびの緒琴(馬關海峽にて)

瀬戸こねてさびしときし雨の音がへりこむ日の興なりさても

たどり入る森のくらきに何なげく朝ともならば恋む花あらむ

われとわが森に辿りてさびしきにさびしと泣かむ君も歌人(以上三首夕闇見より)

運命さだめなり求め入りにしとこやみの森に光のありとし思ふや

跡もなうわが名は黒くぬられたり野には咲けく春風秋風(二首々へし)

さと百里禪寺の門の秋風やみちし思の胸ひやしみる

君やわれや空ゆつちゆの思遠く夕野相みて戀うつぐしむ

そら遠くしたふ光の今ぞ沈むのべに祈りの聲ひどかせむ、

歌たびしよべのみ姿求め入るにこよひゆかしき眠のひろぬ、

その夜共に名けし星よ名は忘れずみはかべよぶに光流れよ、

植もみしみなみの椰子の若緑若きるよぎの南風なづかに故國戀ふ、

三日三夜のあらしはないで雲美し夕野静に世は秋に入るあかふ